



脂質生化学研究 Circular

2014

日本脂質生化学会
(JCBL)

日本脂質生化学研究 サーキュラー 2014

目 次

第 56 回日本脂質生化学会のお知らせ		1
平成 26 年度日本脂質生化学会 総会・幹事会のお知らせ		6
第 56 回日本脂質生化学会 発表演題の募集		7
第 56 回日本脂質生化学会 宿泊申込のご案内		9
第 56 回日本脂質生化学会を開催するにあたって	岩森 正男	11
第 55 回日本脂質生化学会を開催して	青木 淳賢	12
第 55 回日本脂質生化学会に参加して	山守 なつみ	13
54 th ICBL に参加して	徳村 彰	14
第 55 回国際脂質生物科学会議（55 th ICBL）のお知らせ	伊東 信	17
脂質生化学を駆使した生体膜研究を目指して	伊藤 俊樹	18
酸化脂質の新たな機能解析を目指して	今井 浩孝	20
会の活動状況		23
賛助会員		27
会則		28
学会事務の取り扱い内容と連絡先		30

第56回 日本脂質生化学会のお知らせ

期日：2014年（平成26年）6月6日（金）、7日（土）

会場：近畿大学東大阪キャンパス

〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1

＊会場へのアクセスについては、「会場のご案内」をご覧ください。

実行委員長：岩森 正男（近畿大学理工学部）

〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1

Tel：06-4307-3439、Fax：06-6723-2721

E-mail: jcbl2014@life.kindai.ac.jp

大会ホームページ：<http://jcbl.jp/wiki/JCBL:56>

大会テーマ：ライフサイエンスにおける脂質生化学研究

発表形式：すべて口頭発表

A講演：発表15分＋討論5分＝20分

B講演：発表10分＋討論5分＝15分

講演時間は演題数によって変更することもあります。

発表はすべて液晶プロジェクターを用います。

特別講演

楠 進（近畿大学医学部神経内科主任教授）

シンポジウム

1. 植物脂質研究の新展開
2. スフィンゴ糖脂質研究とヘルスサイエンス—機能・動態・認識と応答—
3. 脂質メディエーター研究の現状と未来

ランチョンセミナー

1. 島津製作所： 質量分析
2. 日本ウォーターズ： 質量分析
3. あすか製薬： 高脂血症薬

事前参加申し込み締め切り：4月30日（水）（5月下旬頃に参加証を送付します。）

名誉会員、賛助会員の皆様には別途ご案内申し上げます。

学会参加登録費：事前参加登録 一般 6,000円 学生 3,000円

当日参加登録 一般 7,000円 学生 4,000円

（非会員の方は、要旨集代金を別途申し受けます。）

懇親会 日時：6月6日（金）19時頃より

会場：シェラトン都ホテル大阪

〒543-0001 大阪市天王寺区上本町 6-1-55

Tel：06-6773-1111（近鉄上本町駅 1 分）

懇親会参加費：一般 6,000 円/学生 3,000 円

事前参加登録と懇親会の事前申し込みは、同封の郵便振替用紙をご利用下さい。

振込先：郵便振替口座：00930-7-329051 第56回日本脂質生化学会大会

参加登録費、懇親会費は出来るだけ事前にお振り込み下さい。

会場周辺の地図と交通アクセスについては、「会場のご案内」のページをご覧ください。

宿泊・交通の手配をご希望の方は、「宿泊のご案内」のページをご覧ください。

第56回 日本脂質生化学会
特別講演、シンポジウム、ランチョンセミナーのお知らせ

特別講演：6月6日（金）

座長：塩崎均（近畿大学学長）

講演者：楠 進（近畿大学医学部神経内科主任教授）

「免疫性神経疾患と糖脂質に対する自己抗体」

シンポジウム1：6月6日（金）

植物脂質研究の新展開

オーガナイザー：吉田元信（近畿大）、太田啓之（東工大）

講演者：吉田元信（近畿大）「油糧作物における不飽和脂肪酸の合成調節機構」

太田啓之（東工大）「葉緑体の脂質合成系 -その進化と油脂生産との関わり-」

明石欣也（鳥取大）「バイオ燃料植物ジャトロファの種子における脂質生合成制御」

今井博之（甲南大）「植物科学分野におけるスフィンゴ脂質研究の現状」

松井健二（山口大）「グリセロ脂質上で進行する植物オキシリピン代謝経路」

シンポジウム2：6月6日（金）

スフィンゴ糖脂質研究とヘルスサイエンスー機能・動態・認識と応答ー

オーガナイザー：梅崎良則（ヤクルト中研）、臼杵靖剛（北海道大）、

講演者：梅崎良則（ヤクルト中研）「腸内菌定着における宿主応答」

臼杵靖剛（北海道大）「糖脂質エピトープの抗体認識の問題点とコレラトキシン
エピトープ認識ペプチド」

内田良一（UCSF）「セラミド代謝産物と自然免疫（抗菌ペプチド産生シグナル）」

松田純子（川崎医大）「スフィンゴ糖脂質のセラミド骨格の構造多様性が担う生
物機能」

シンポジウム3：6月7日（土）

脂質メディエーター研究の現状と未来

オーガナイザー：植田弘師（長崎大）、福嶋伸之（近畿大）

講演者：可野邦行、青木淳賢（東北大）「LPA3 を介する迷走神経機能の解明」

有田誠（東京大）「オメガ3 脂肪酸と炎症性疾患の制御」

横溝岳彦（順天堂大）「上皮保護作用を有する 12-HHT 受容体 BLT2」

植田弘師（長崎大）「慢性疼痛病態時のリゾホスファチジン酸生合成のフィード
フォワード制御」

福嶋伸之（近畿大）「脂肪酸によるがん細胞成長の調節」

ランチョンセミナー1：6月6日（金）

株式会社島津製作所： 質量分析

ランチョンセミナー2：6月6日（金）

日本ウォーターズ株式会社： 質量分析

ランチョンセミナー3：6月7日（土）

あすか製薬株式会社： 高脂血症薬

寺本民生（帝京大学 臨床研究センター センター長）

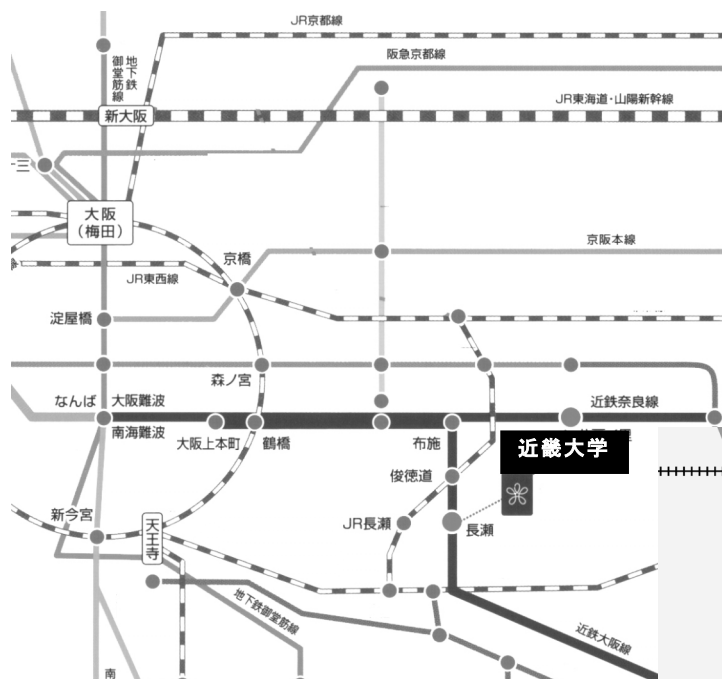
なお、日程、演題タイトル等につきましては変更の可能性があります。演者等につきましても、決定次第、大会ホームページに掲載致します。

第 56 回 日本脂質生化学会 会場のご案内

大会会場：近畿大学東大阪キャンパス

〒577-8502 東大阪市小若江 3-4-1

Tel : 06-671-2332 <http://www.kindai.ac.jp>



近畿大学東大阪キャンパスへのアクセス

「JR 新大阪」→ (JR 京都線) → 「大阪駅」→ (JR 大阪環状線) →

「鶴橋駅」→ (近鉄大阪線) (普通) → 「長瀬駅」下車、徒歩 10 分

「鶴橋駅」→ (近鉄奈良線) (普通) → 「八戸ノ里」下車、徒歩 20 分又はバス 6 分

懇親会会場：シェラトン都ホテル大阪

〒543-0001 大阪市天王寺区上本町 6-1-55

Tel : 06-6773-1111

シェラトン都ホテル大阪へのアクセス

「長瀬駅」→ (近鉄大阪線) (普通) → 「上本町駅」下車、徒歩 1 分

「八戸ノ里駅」→ (近鉄奈良線) (普通) → 「上本町駅」下車、徒歩 1 分

平成 26 年度 日本脂質生化学会総会のお知らせ

上記の総会を平成 26 年 6 月 6 日（金）夕刻、一般演題終了後（開催時刻・会場は改めてご案内差し上げます）開催いたします。ご出席賜りたく存じます。

会長 和泉 孝志

- 議題
1. 平成 25 年度事業報告
 2. 平成 25 年度決算報告ならびに監査報告
 3. 平成 26 年度事業計画ならびに予算案
 4. その他

平成 26 年度 日本脂質生化学会幹事会のお知らせ

上記の幹事会を平成 26 年 6 月 6 日（金）昼頃に開催いたします（開催時刻・会場は改めてご案内差し上げます）。幹事・名誉会員の皆様のご出席をお願いいたします。

会長 和泉 孝志

- 議題
1. 平成 26 年度日本脂質生化学会総会への提案事項の検討
 2. その他

第 56 回日本脂質生化学会 発表演題の募集

○演題の申し込みについて

本年度も演題登録は「大学医療情報ネットワーク(Umin)の ELBIS システム」を用いて、インターネット上から行います。連絡用に電子メールのアドレスが必要ですので、各自ご用意下さい。また印刷用の講演要旨は、電子メールの添付ファイルで下記事務局 (jcbl-org@pharm.showa-u.ac.jp) までお送りください。PDF ファイルと Word ファイルの両方を送付して頂きます。

筆頭演者は本学会の会員に限ります。未入会の方は必ず本年 4 月末までに入会手続きを完了してください。

演題登録の開始は平成 26 年 3 月 4 日 (火)、締め切りは平成 26 年 4 月 4 日 (金) です。講演要旨の締め切りは平成 26 年 4 月 11 日 (金) です。

○ 演題登録の仕方

- 1) 次ページの作成要領に従って講演要旨を作成して下さい。「要旨(600 字以内)」は演題登録の際に必要ですので、ワープロファイルまたはテキストファイルをご用意下さい。
- 2) 日本脂質生化学会のホームページ(<http://jcbl.jp/wiki/JCBL:56>)にアクセスし、「演題申込」を選択して下さい。
- 3) 与えられた指示に従って演題登録を行って下さい。必須項目を空欄のままにしておきますと、登録ができませんのでご注意下さい。登録内容は締め切りまで変更可能ですが、登録の際に入力したパスワードが必要になりますので、必ずメモを取って下さい。
- 4) 登録終了後、抄録登録[受付番号]というタイトルの電子メールが発表代表者に届きますので必ず保存しておいて下さい。
- 5) インターネットが使用できない方、登録ができない方は、講演要旨をお送り頂く前に、以下の講演要旨送付先までご連絡下さい。

○ 講演要旨送付先 (PDF ファイルと Word ファイルの両方)をお送り下さい)

E-mail アドレス : jcbl-org@pharm.showa-u.ac.jp

〒142-8555 東京都品川区旗の台 1-5-8

昭和大学薬学部衛生薬学部門内

日本脂質生化学会 講演要旨受付 (担当 : 中谷良人)

電話:03-3784-8197 FAX:03-3784-8245

○ 学会についてのお問い合わせ

〒577-8502 東大阪市小若江 3-4-1

Tel : 06-4307-3439、Fax : 06-6723-2721

E-mail: jcbl2014@life.kindai.ac.jp

近畿大学理工学部生命科学科生化学 岩森 正男

第 56 回日本脂質生化学会 講演要旨作成要領

1. テンプレートを使用する場合、日本脂質生化学会ホームページ(<http://jcbl.jp/wiki/JCBL:56>)から「講演要旨作成テンプレート」をダウンロードし、マイクロソフト Word で作成して下さい。テンプレート上で入力すれば、字体や大きさが統一されます。
2. テンプレートを使用されない場合は以下の要領で作成して下さい。
 - * A4 サイズ、縦 260 mm×横 170 mm の大きさに作製して下さい。原則として字の大きさは 12 ポイント、フォントは「MS 明朝」をご使用下さい。要旨集印刷の際、4/5 程度に縮小されて印刷されます。ページ番号は付けなくて下さい。
 - * 演題名：全角 8 文字目から書き始め、2 行以内に納めて下さい。
 - * 氏名・所属：演題名より 1 行空けて下さい。全角 8 文字目から氏名を書き、所属は適当な略記を用いて()内に入れて下さい。発表者(または連絡著者)の電子メールアドレスを記載して下さい。
 - * 要旨：氏名・所属より 1 行空け、全角 1 文字空けて書き始めて下さい。全体を枠で囲んで下さい。
 - * 本文：要旨より 2 行空けて下さい。
3. 講演要旨の作成にあたって
 - * 1 ページから 6 ページの範囲で作成して下さい。
 - * 日本語か英語で作成して下さい。
 - * 講演要旨により、日本脂質生化学会会則第 2 条に定められた本会の目的に沿わないと判断される演題は、発表をお断りすることがあります。
 - * 講演要旨の作成にあたっては、著作権、知的財産権、及び二重投稿と解釈されることへの懸念等についてご留意下さい。
4. 講演要旨の送付にあたって
 - * 講演要旨の PDF ファイルおよび Word ファイルを、前ページの「講演要旨送付先」まで電子メールの添付書類としてお送り下さい。
 - * 電子メールの「件名」の欄に、演題登録後に届いた「抄録登録[受付番号]」を明記してください。

講演要旨締め切りは平成 26 年 4 月 11 日(金)です。

なお、WEB からの演題登録（締め切り 4 月 4 日（金））を忘れずに行ってください。

第 56 回日本脂質生化学会 宿泊申込のご案内

この度、「第 56 回日本脂質生化学会」開催にあたり、ご参加される皆様方の便宜をおはかりするため、宿泊の手配をお手伝いさせて頂くこととなりました。厚く御礼申し上げます。

つきましては、下記ご参照の上、学会のホームページにもリンクされています宿泊受付ホームページから、ご予約をお願い致します。

(宿泊受付ホームページアドレス <https://v3.apollon.nta.co.jp/jcbl56/>)

1、宿泊期間 : 平成 26 年 6 月 5 日 (木) ~ 6 月 6 日 (金) の 2 泊

2、宿泊料金 : 1 泊朝食税金サービス料込のお一人様料金です。

3、お申込方法 : (1) 左上の「新規利用登録」のところから入力フォームに従って必要な情報をご入力ください。

(2) ログイン完了後、「ホテル予約」画面での操作が可能となります。

(3) 予約完了後、確認メールが登録のメールアドレスへ配信されますので、内容を必ずご確認ください。

(4) 予約終了後、「お支払い」ページよりお支払い方法を確定してください。

お支払い方法は、クレジットカード又はコンビニ決済となります。

(5) 宿泊に関する予約確認書・請求書・クーポン券などの送付はございません。

地区	ホテル名	宿泊料金(1泊朝食税サ込)			アクセス
		シングル	ツイン	ツイン又はダブルシングルユース	
		料金	料金	料金	
近鉄 大阪上本町 駅	シェラトン都ホテル大阪	¥15,000	¥12,000	¥20,000	近鉄「大阪上本町」駅直結
	ダイワロイネットホテル上本町	¥9,800	—	—	近鉄「大阪上本町」駅14番出口より徒歩2分
	ホテルアウィーナ大阪	¥7,300	¥6,800	¥8,300	近鉄「大阪上本町」駅より徒歩3分

■ツイン又はダブルシングルユース・・・お一人様のご利用となります。

5、申込み締切日 : 平成 26 年 5 月 23 日 (金)

6、取消料 : 取消料金は、下記表の料金が必要となります。宿泊日、人員の変更の場合にも下記取消料金ががかかりますのでご了承下さい。(旅行条件詳細につきましては宿泊受付ホームページで必ずご確認ください)

宿泊日の 7 日前から 4 日前まで	宿泊日の 3 日前から前々日まで	宿泊日の前日	宿泊日の当日・不泊
10%	20%	40%	100%

7、お申込み・お問い合わせ先

(株)日本旅行 西日本 M I C E 営業部

〒530-0001 大阪市北区梅田 1-11-4 大阪駅前第 4 ビル 5 階

TEL06-6342-0230 FAX06-6342-0232 E-mail : ec_gakkai@nta.co.jp

第 56 回日本脂質生化学会を開催するにあたって

実行委員長 岩森 正男

此の度、第 56 回日本脂質生化学会の実行委員長を仰せつかりました。大阪での大会は過去 5 回開催されていますが、今回は第 40 回以来 16 年ぶりの大会となります。大阪は、平安・鎌倉時代に油座が設けられ、産業としての油脂製造が始まり、灯明、化粧品、食品として人々が油を使い始めた記念の地でもあります。大阪での大会が歴史的視点に立って、現在を評価し、未来を展望するきっかけになればと考えています。歴史に対し、鋭い洞察を行っておられる作家、司馬遼太郎の記念館がキャンパス近くに 있습니다。時間があれば訪れて頂き、司馬先生の思いを体感して頂ければと思います。

今大会のテーマは「ライフサイエンスにおける脂質生化学研究」とし、生化学に留まらず、幅広い分野の中心的課題となっている脂質研究の現在を概観し、相互の情報交換を通じて今後の展望を図れればと考えています。特別講演は、近畿大学医学部神経内科主任教授の楠進先生にお願いしました。先生は免疫性神経疾患に関する研究の第一人者であり、全国の病院から寄せられる患者の診断と治療に当っておられます。

「免疫性神経疾患と糖脂質に対する自己抗体」というタイトルで先生の長年の研究成果と最新の知見についてお話し頂く予定です。また、シンポジウムは「植物脂質研究の新展開」オーガナイザー・吉田（近畿大）、太田（東工大）、「スフィンゴ糖脂質研究とヘルスサイエンス—機能・動態・認識と応答—」オーガナイザー・梅崎（ヤクルト中研）、臼杵（北海道大）、「脂質メディエーター研究の現状と未来」オーガナイザー・植田（長崎大）、福嶋（近畿大）の三テーマを予定しています。バイオ燃料や栄養学的にも注目されている植物脂質研究、医学・免疫学分野へと急展開する生理活性脂質研究など、ライフサイエンスにおける脂質研究の諸問題を集中的に討議し、将来への道筋が描ければと期待しています。

懇親会は、利便性の良い近鉄沿線の上本町駅にありますシェラトン都ホテル大阪で行います。全国的に近大ブランドとして知名度が高い近大マグロを味わっていただく予定です。懇親会を通じて旧交を温めて頂くとともに、研究に関する議論を通じて新しいアイデアが生まれ、親交を深める場にして頂くことを期待しています。

多くの学会員の皆様のご参加を心からお待ちしております。

第 55 回日本脂質生化学会を開催して

東北大学大学院薬学研究科 青木淳賢

昨年、6月6、7日に宮城県松島にありますホテル松島大観荘にて日本脂質生化学会を開催させて頂き、約200名と地方での会としては多くの脂質研究者に参加して頂きました。ありがとうございました。本学会は今年で第55回を迎える歴史のある研究会です。思い起こせば、ちょうど2年前の東北大震災の直後、和久敬三先生に推薦して頂き、2013年の本会をお世話させて頂くことになりました。会場は、松島の海岸から数十メートル上った丘の上にあり、松島湾を一望できる絶景のホテルでした。温泉も充実しておりましたので、学会以外にも楽しまれた先生方も多かったのではないかと思います。また、今回の学会は、数年前和泉会長が開催された伊香保温泉での会に習い、多くの先生方に会場であるホテル松島大観荘にお泊まり頂きました。約2日に渡り寝食をともにして頂き、脂質研究談義に没頭して頂く良い機会になったのではないかと思います。

本学会では、2つのシンポジウムを開催しました。まず、「酸化脂質研究の最前線-疾患シグナルとしての酸化リン脂質と新たな解析法-」と題し、宮澤陽夫先生（東北大・農）と今井浩孝先生（北里大・薬）におまとめ頂きました。酸化リン脂質の分野にはまだまだ未解明な研究課題が多く残されていますが、若手の研究者の活躍でこれら問にも答えが出すことができる日も近いのではと感じました。もう一つのシンポジウムは「リゾリン脂質の新たな生理機能と病態」で、徳村彰先生（徳島大・薬）と石井聡先生に（秋田大・医）に座長をお願いしました。この分野の最新知見の多くが本学会で発表されてきた経緯もあり、基礎的な研究成果から、創薬開発まで幅広い発表が行われました。シンポジウムと並び、本会ではシニアな先生のこれまでの研究をまとめて頂くという形で特別講演をお願いしました。田口良先生は（中部大学）はこれまでの質量分析機器を用いた脂質解析分野を長年牽引してきた先生ですが、この分野にはまだまだ未解明な問題が多いことを痛感しました。徳村彰先生は、リゾリン脂質や血小板活性化因子の研究でオリジナルな研究成果を世界に発信し続けてきた研究者ですが、長年の仕事の紹介から最新知見まで先生のお人柄と研究に対する姿勢がよく分かるお話で、多くの若手研究者も大変参考になったものと思います。最後になりますが、本会を開催するにあたり、多くの先生方、企業の方々にお世話頂きました。また、和泉会長をはじめ、役職の先生方にはいろいろなアドバイスを頂きました。特に、中谷良人先生（昭和大薬）には細かい点までフォローして頂きました。また、東北大学薬学系研究科分子細胞生化学のメンバーは一丸となって会場設営・会の進行をサポートしてもらいました。この場を借りて、厚く御礼申し上げる次第です。本会が、今後益々発展することを祈念したいと思います。

第 55 回日本脂質生化学会に参加して

東京大学大学院薬学系研究科 衛生化学教室
修士課程 2 年 山守 なつみ

去る 2013 年 6 月、私は仙台（松島）で行われた第 55 回日本脂質生化学会にて発表の機会を頂きました。私はこれまでに何度か学会に参加していますが、学会の醍醐味の一つとして普段はお会いする機会の少ない他の研究室の方々と交流できることがあります。本学会でも合間の時間に他の研究室の方々と松島湾のクルーズをしたり、懇親会で盛り上がり（酔っぱらっていてあまり覚えていませんが…）と、多くの方々と交流し、研究の話からたわいもない話まで沢山のお話をする事ができ、とても楽しく有意義な時間を過ごすことができました。

さて、本学会で私は「ホスファチジルイノシトール特異的アラキドン酸導入酵素 LPIAT1 の結合分子の同定」という題目で発表をさせて頂きました。脂質に非常に詳しい方々の前での発表ということで、非常に緊張したことを覚えています。それと共に、脂質を専門とする方々が私の発表にこういったレスポンスをして下さるのだろうと、ワクワクする気持ちもありました。発表当日は 1 日目の朝一番にも関わらず大勢の方が私の発表を聞いて下さり、また、多くの先生方からご意見を頂き、非常に嬉しかったです。このような機会に恵まれたことに深く感謝すると共に、今後の研究生活に必ず活かしていきたいと考えております。

本学会で印象に残っているのは、徳島大学の徳村先生のリン脂質メディエーターについてのお話です。リン脂質メディエーターの研究は現在ではその産生酵素や生理活性、受容体、疾患との関連など様々なことが明らかとなっており、臨床への応用が議論されるに至っています。ここまで研究が発展した背景にはいくつものブレイクスルーとなる発見があり、更にその裏には研究者の方々の血のにじむような努力があったことと思います。私も自分の研究分野を大きく進展させられるような発見ができるよう、日々努力をしていかなければならないと気を引き締め直しました。

今回の学会を通して、脂質の奥深さ、面白さ、そして皆様の研究に対する熱い思いを肌で感じる事ができました。大学院生という身でこのような有意義な会に参加でき、非常に良い経験ができたと感じております。もっと大きな成果をこの学会で報告することができるように、より一層研究に没頭していきたいと思っております。

最後になりましたが、実行委員長の青木先生を始め、大会運営に尽力して下さったスタッフの皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

今世紀に入り地球温暖化は加速し、2013 年度も変動が激しい天候状況である。それに慣れてしまったのか、例年より多く発生する台風 18 号の接近にも無関心でいたため、54thICBL 開幕の前々日深夜、徳島と淡路島を結ぶ大鳴門橋閉鎖の TV ニュースに慌てふためき、急ぎ自家用車で唯一通行可の瀬戸大橋を経て四国を抜け、高速道路と一般道路を交互に乗継ぎ、やっとの思いで翌日の午前中に関西空港に到達した。小生がローマへ旅立つことができた午後には台風 18 号は関西を抜けたが、午後には伊豆を含む関東一円に猛威を振るい、ヨーロッパ行きの飛行機便の一部を欠航に追いやった模様である。このような事態を潜り抜け 54thICBL に参加した日本人は 18 名であり、例年より少数であった。学会主要テーマとの関連が推定されるが、学会開催地であるバーリが地中海に面するナポリとは逆方向のアドリア海に面しており日本人には知名度が低いのも一因かもしれない。また、幾つかの旅行ガイド本を読むと、決まってバーリ旧市街地や汽車駅付近では治安がかなり悪いと書かれているが、そのような気配を駅前のホテルに連泊していた小生は全く感じなかった。

駅からはかなり離れた高台にあるシェラトンニコラスホテルで学会は開催された。このホテル周辺には高層マンションが立ち並んでおり、この地域（プーリア州）の中核商業・工業都市としてバーリが発展している様子が伺われた。口頭発表は地下 1 階の立派な広い会議場にて行われた。世話役の手助けを借りて演者がパソコンを接続しながら講演をつなぐという方式であったが、概ね大きなトラブルもなく進行し、議長が主導する討論時間が短縮されることもなかった。ただ、大会直前にメールで発表要旨が送付されただけで大会会場では要旨集は配られず、運営を簡素化しようとする姿勢が感じられた。

口頭発表は 7 セクションに分類されており、9 月 18 日（火）に最初の 2 セクション「核内受容体と脂質代謝の転写調節」と「脂質のための腸肝連関 一栄養学と生活習慣との関連一」で始まり、9 月 21（土）の「膜マイクロドメインの動態とその病態生理学的意義」と「脂質ストレス管理における脂質と膜 一ストレス受容、シグナル伝達、修復、適応一」で終幕となった。この最終日午前のセクションには日本の研究者による講演が 3 題含まれていた。コレステロールとリン脂質（ホスファチジルコリンとスフィンゴミエリン）との分子相互作用に関する研究成果を発表した関西学院大学の三好先生による本学会の見聞記に、脂質ラフト等の膜マイクロドメインに関する発表が紹介されるものと思われる。そこで、それ以外のセクションの中から小生の印象に残った発表を以下、紹介したい。選別がかなり偏っているが、何卒、容赦下さい。

最初の 2 セクションでは、核内受容体[PPAR $\alpha, \beta/\delta, \gamma$; FXR (farnesoid X receptor), LXR β (oxysterol receptor) 等]の遺伝子を改変した動物を用いて肝臓や脂肪組織で

の脂質代謝の病態生理学的な意義を解明しようとする発表が多かった。特に、「脂質代謝における胆汁酸シグナリング」と題する Gionvanni Galli 記念特別講演 (Dr. J. Chiang, ノースイーストオハイオ大) を始めとする腸肝連関や胆汁に関する発表は興味深い内容を含んでいた。また、アムステルダム大学の Dr. R. P. J. Oude Elferink による胆汁鬱滞に伴い上昇する搔痒因子リゾホスファチジン酸 (LPA) 産生酵素 autotaxin (ATX) に関する発表は異彩を放っていた。ヒト胆汁の未知分子が肝臓で作用し循環血液の ATX 濃度を高め LPA 産生が亢進し、第 2 の胆汁の未知分子と共同して強い搔痒感を生じさせるとの内容であったが、胆汁鬱滞のモデルマウスでは、循環血液中の ATX 濃度はヒト患者で見られたような著しい増加は認められないという。この胆汁の未知因子の同定が待たれるところである。東京大学の直井壮太郎博士らは、2 型の家族性肝内胆汁鬱滞症は、胆汁塩を胆汁に送出するポンプ (ABCN11) の遺伝子変異によるとの知見から、R1231Q の変異型ポンプを発現している HEK293 細胞の細胞膜への発現が大きく低下しているとの結果をポスター発表していた。興味深いことに、ornithine transcarbamylase 欠損症の治療に用いられている 4-フェニル酪酸は、この発現減少を緩和できるとの結果も示されていた。ウイーン医科大の Dr. M. Trauner は、adipose triacylglycerol lipase (ATGL/PNPLA2) を欠損したマウスをメチオニン・コリン欠乏食で飼育すると、脂肪肝や肝炎が増悪しているという成果を報告した。この脂肪肝 (NASH) モデルマウスにおいては、TG のみならず TNF α , iNOS, MCP-1, IL-1 β , collagen 1 α 1, collagen 1 α 2, TGF β , PPAR α や FGF21 量が増加し肝炎・線維化が進行しており、PPAR α アゴニスト処置でそれが改善することが示された。第 3 セクションの主題は「糖尿病と動脈硬化における脂質代謝異常」であり、実験動物を用いて HDL や LDL のみならず特定の脂質クラス (遊離脂肪酸、セラミド、中鎖トリグリセリド) の作用の焦点を当てた研究や冠動脈周辺脂肪組織に特異的な動脈硬化マーカー遺伝子の検索という 2 題の臨床試料での研究が発表された。

第 4 セクション「脂質代謝、転写、幹細胞化」では、Dr. N. R. Hannon (ケンブリッジ大) は、毛包幹細胞の PPAR γ を欠損させたマウスでは癬痕性脱毛が生じることが知られており、それが毛包の形態形成の遅れによる毛周期異常であるとの結果を示していた。本セッションでは九州大学の伊東信博士が、海洋生物がドコサヘキサエン酸 (DHA) やエイコサペンタエン酸をホスファチジルコリンやトリアシルグリセロールに高率に取り込む分子機構を解析し新規なリゾリン脂質アシル転移酵素であるホスファチジン酸合成酵素 (PLAT6) のクローニングやそのリコンビナント酵素の基質特異性 (DHA-CoA からリゾホスファチジン酸への DHA の転移) に関する成果を講演した。講演後のコーヒブレークの際、複数の ICBL 重鎮メンバーが、海洋生物での遺伝子操作の精巧な技法やその応用による卓越した成果を称え、伊東博士にエールを送っていたのが印象に残っている。第 5 セクション「脂質代謝の調節におけるシグナル伝達、遺伝子発現と日内リズム」では、stearoyl-CoA desaturase と乳がんの進行及び 3T3-L1 脂肪前駆細胞での DNA メチル化に関する講演が 2 題続いた。

ポスター会場は、口頭発表会場の入り口を出たロビー内で行われ、飲料・菓子サービスの場も隣接しており、移動には都合が良かったが、2列ボードの両面添付のため、大会中に2回設定されたポスター討論の際には、2列の間の空間で人が混雑して話しにくい状況であった。ポスターセッションは前半の日程で37題が、後半の日程で36題が発表されたっており、その中で小生の興味を引いたポスターの内容を以下に簡潔に紹介する。

ブラジルから参加した Dr. M. A. C. Silva-Neto のグループは5題を発表していた、その中で、血漿リゾホスファチジルコリンと分泌性ホスホリパーゼ A₂ 活性の高値が寄生虫感染 (*Trypanosoma cruzi*) による心臓疾患(シャガス病)のマーカーとなること、並びにシャガス病を媒介する昆虫 (*Rhodnius prolixus*) の唾液中の脂質に LPC が多く LPC には *Trypanosoma cruzi* の感染を促進する作用があることから、唾液 LPC が病態生理学的役割を果たしているとの推論している。宿主の血液にはすでに高濃度の LPC が存在しており昆虫唾液からの LPC 注入のみでシャガス病患者血漿 LPC 濃度の高値は説明しにくいので、ホスホリパーゼ A₂ やその調節・誘導因子を含むより複雑な機構が働いているものと予想される。本大会の7主題に関連するポスターに加えて、カルジオリピンの脂肪酸リモデリング等の発表が5題、トランスポーターと n-3 脂肪酸関連が4題ずつ発表されていた。ショウジョウバエの脂質代謝物の網羅的分析に加え、臨床試料を用い標的分子を限定したリポミクスの研究も幾つか発表されていた。ブラッドホード大学の A. C. Kendall 博士らのグループは健常者と接触皮膚炎患者皮膚のエンドカンナビノイド、セラミドとエイコサノイドの LC-MS/MS 結果を2題のポスターで、大阪大学の東城博雅博士はヒト血漿・血清試料を用いる系統的な糖スフィンゴ脂質の LC-MS 分析法を提示していた。小生のグループは、冠動脈疾患と大動脈疾患患者の血漿中のリゾグリセロリン脂質6クラス、リゾスフィンゴ脂質2クラス、血小板活性化因子様酸化ホスファチジルコリン3クラスの LC-MS/MS 分析結果を発表した。大会の4日目の午後は、ロマネスク様式の建築物が残るバーリの旧市街や周辺の観光するエクスカージョンが行われ、8時頃から晩餐会となったが、公式な挨拶等は手短かに終わり、イタリア内でも評価の高いプーリア州ワインと海産物を含む実に美味しい料理を糧とし歓談に終始後、真夜中の終了となった。次回は、イギリスの Aberdeen で例年より早く 6/23-27 に開催とのことで、メンバーの多くは再会を約束していた。

第 55 回国際脂質生物科学会 (55th ICBL) のお知らせ

55th ICBL は Aberdeen (Scotland) で下記のように開催されます。要旨提出の締め切りは 2014 年 1 月 31 日でしたが、登録は 5 月末まで可能です。プログラム、登録方法等に関しましては、下記の HP に掲載されています。奮ってご参加下さい。

九州大学 伊東 信
(ICBL corresponding member)



=====

会期 : 2014 年 6 月 23-27 日

場所 : Riverside East, Robert Gordon University, Aberdeen, Scotland

55th ICBL HP: <http://www.abdn.ac.uk/events/icbl-2014/abstract-submission/>

ICBL HP: <http://www.icbl.unibe.ch/index.php?id=2>

Abstract Submission Deadline: 2014 年 1 月 31 日

Early Bird Registration Deadline: 2014 年 4 月 25 日

Registration Deadline: 2014 年 5 月 30 日

Preliminary Main Topics

Lipid Modulators of Inflammation and Immunity

- Lipid Modulators of Inflammation and Immunity
- Modified Fatty Acids and Lipids
- Endocannabinoids: Synthesis and Function
- Phytolipids - A Vision for the Future?
- Lipidomics - What's Next?
- Lipids in Whole Body Systems
- Membrane Lipid Trafficking

脂質生化学を駆使した生体膜研究を目指して

神戸大学バイオシグナル研究センター 伊藤俊樹

本年より日本脂質生化学会の幹事を拝命することとなりました。この場をお借りして、ご推薦を賜りました先生方に御礼申し上げますとともに、自己紹介をさせていただきます。

私は 1994 年に東京大学医科学研究所・癌生物学研究部に大学院修士学生として所属して以来、延べ 17 年間に渡り竹縄忠臣教授のご指導のもとで研究を続ける機会に恵まれました。私が学生として入室した竹縄研究室では、当時のシグナル伝達における最先端の研究が繰り広げられておりました。特に Grb2 の下流分子の探索では、海外の一流ラボとの抜きつ抜かれつの競争の末、ついに三木裕明さん（現大阪大学微生物病研究所・教授）による N-WASP の発見とそれに続く WAVE ファミリーの発見が成し遂げられた時期でもありました。一方の私は、竹縄先生のご意向から独自の路線を模索するような研究テーマを与えられていたこともあり、なかなかそのようなエキサイティングな経験を出来ずにおりました。そんな時、私より一年遅く研究室に加わった匂坂敏朗さん（現神戸大学医学部・教授）が始めた、当時まだ未同定であった分子量約 150kD の Grb2 下流因子の遺伝子クローニングの仕事をお手伝いすることになりました。数年前に横溝岳彦先生が当欄へのご寄稿で「土曜日の朝には良いことがある」と書かれていたのと同じく、ある土曜日の朝だったと思います。匂坂さんの精力的かつパワフルな努力によって得られた DNA 配列のラダーを X 線フィルムから二人で読み上げ、Telnet 通信でテキストファイルを送り FASTA 検索を行うと（今の学生さんには意味が分からないかも知れませんが「Google Chrome で BLAST のサイトに行き、DNA シークエンサーが作ってくれた seq ファイルをコピーしてサーチボタンを押す」と同義です）、驚くべきことにイノシトールリン脂質の脱リン酸化酵素

(5-phosphatase) の相同配列が現れました。後にこの分子は、私の留学先ともなった Yale 大学の Pietro De Camilli のグループとの競争に負けたことにより synaptojanin と命名されてしまうのですが、私には一見クラシックな研究に思えたイノシトールリン脂質の奥の深さを強烈に印象付ける出来事となりました。

これを契機にして、私の研究は PIP2 産生酵素のクローニングや PIP2 そのものに結合する因子の探索にシフトして行きました。幸運にも恵まれて、それまで知られていなかった PIP2 結合因子を同定することができました。その仕事が奇しくも再び前出の De Camilli らのグループと重なって行くことになり、もはやこれは運命だという思いから、De Camilli 研への留学を決めました。約 2 年間の短い期間でしたが、アメリカはもちろんイタリア、ドイツ、フランス、スイス、ロシア、クロアチア、中国、韓

国、日本という実に多国籍な研究室で切磋琢磨できた経験は、私の研究姿勢に今も有意義な影響を与えてくれています。その際に取り組んだ研究が、人工リポソームを用いた生体膜の形状観察法でした。De Camilli 研は竹居孝二先生（現岡山大学医学部・教授）による先駆的なお仕事から、シナプス小胞形成の *in vitro* 再構成系、特に dynamin による脂質二重層のチューブ形成に代表されるユニークな研究を進めていました。前述の synaptojanin の発見により、研究室はイノシトールリン脂質代謝を介した膜輸送の分子機構の解明を目指しており、私も毎日イノシトールリン脂質代謝酵素のノックアウトマウスの解析と、リポソームを用いた実験系を並行して進めていました。その結果、後者のプロジェクトがうまく転がったことで、新たな生体膜の形状制御因子のファミリーを見出すことが出来ました。以来、脂質分子単独での作用ではなく、脂質二重層としての特性を反映する生体膜の振る舞いを考慮しながら、新しい脂質生化学と膜研究との融合を図るべく研究を続けています。

アメリカから帰国後も竹縄研に復帰させて頂き、研究室の神戸大学医学部への移転に際しても引き続き神戸での研究の機会を頂きました。また、縁あって 2013 年より同学バイオシグナル研究センターに着任し、現在新たな研究室の方向性を模索する毎日を送っています。神戸大学は故西塚泰美先生による PKC の発見があまりにも有名ですが、その最も大きな意義の一つが「脂質による膜移行と活性化を介したシグナル伝達機構の発見」にあります。C2 ドメインによる細胞膜移行を可視化することに世界で始めて成功された齋藤尚亮先生や、DG キナーゼのエキスパートである白井康仁先生（本学会幹事）とご一緒させて頂きながら、神戸大学の伝統である「脂質を介したシグナル伝達」を更に発展させつつ、これまでにない視点から未踏の領域を切り拓くような研究をして行けたらと願っています。

酸化脂質の新たな機能解析を目指して

北里大学薬学部

今井 浩孝

このたびは日本脂質生化学会の幹事にご推薦いただき、大変光栄に存じます。簡単に自己紹介をさせていただきます。

私は東京大学薬学部に進学した時、人の病気を治すのに役立つ研究がしたいと思い、その当時進んでいたウィルスや免疫の研究に興味を持っていました。大学3年生の時の学生実習で、当時留学から帰ってきたばかりの梅田真郷先生（京大・工）の抗イデオタイプ抗体の研究の話を伺って、この先生について研究をしてみたいと思い、1987年（昭和62年）4月に東京大学薬学部の井上圭三先生（帝京大学・薬）の衛生裁判化学研究室の門をたたくことになりました。4年生、修士課程で、はじめていただいた研究テーマが、「B型肝炎ウィルスの粒子の脂質膜がなぜ特異的なリン脂質（ホスファチジルコリン）を有しているのかを明らかにしなさい」というもので、ウィルス関連研究であったので興味をもってはじめました。はじめて行った研究が、リン脂質の分子種分析の解析で、現在のように LC-MS/MS がない時代でしたので、ガスクロマトグラフィーと2次元TLCなどを駆使して、リン脂質の分類、リン脂質のアルキル型、アルケニル型、ジアシル型の分類や脂肪酸の組成を調べました。表面抗原たんぱく質を導入した繊維芽細胞からできてくる疑似B型肝炎ウィルス粒子を集めて解析を行うため、初めて培養細胞を扱う実験で10リッター以上の培養上清を集めて、N=1 のサンプルが回収できるような実験でしたのでよく培養室を占拠しては、当時衛生裁判化学研究室の先輩たちに怒られていました。卒論発表前に折角集めたウィルス液を倒してこぼし、呆然と立ち尽くしたのを今でも覚えています。ESRを使った脂質膜の流動性実験や、遺伝子組み換え、細胞導入実験を自分で考えてはじめてやってみたことなど、いろいろやってみた研究はあまり上手くはいきませんでした。今でもとても記憶に残っていますし、失敗しても自分で考えてやってみようという研究姿勢や研究技術が現在の研究の礎になっているのはいうまでもありません。

博士課程では、プレートに結合させたトリリノール酸には結合するのに、トリオレイン酸には結合しないモノクローナル抗体の特異性を決めるタンパク質を同定するというテーマでした。この抗体は精製するとトリリノール酸には結合しなく、GIT 培地という抗体産生培地中では特異性を示すというユニークな抗体でした。しかも、夏と冬で反応性が微妙に違うということで、先輩たちが結論づけられなかったテーマでした。案の定、私も常法に従ったタンパク精製法では完全に行き詰まっていたところ、当時、留学から帰国された新井洋由先生（東大院・薬）から教わったリポタンパク質の分離法を用いて、リポタンパク質を検討したところ、apoA-1 がこの抗体のターゲットであり、この抗体はトリリノール酸に結合した apoA-1 のみを認識し、トリオレイン酸やホスファチジルコリンに結合した apoA-1 には反応しないことがわかりました。なぜトリリノール酸には反応し、トリオレイン酸には反応しなかったのかですが、こ

これはプレートに脂質を室温で乾固、固定する際にリノール酸は酸化されやすく、オレイン酸は酸化されにくく、結局、この抗体は酸化されたリノール酸にのみ結合した apoA-1 を特異的に認識する抗体であることを見出しました。さらにこの抗体を産生する B 細胞はマウスにおいて何も免役していない B 細胞からも得られることから、酸化されたトリアシルグリセロールを含むリポタンパク質代謝に関わる自己抗体ではないかという結論に至りました。その当時、apoA-1 が酸化脂質の代謝に関わるということは全く報告されていませんでしたが、後に、apoA-1 が酸化脂質を還元する活性を持つことが報告され、酸化脂質によって apoA-1 自身が酸化されることが報告されたことから、この抗体は構造変化した酸化 apoA-1 を認識していたと考えられました。その当時は、LC-MS/MS もなかったもので、修飾アミノ酸の同定や酸化脂質の詳細な分子構造の同定までには至りませんでしたが、この博士課程での酸化脂質との出会いが今の私の研究の原点にあります。

平成 5 年（1993 年）4 月博士を取得後、北里大学薬学部衛生化学教室（中川靖一教授）の助手として赴任し、酸化リン脂質の還元酵素の一つであるリン脂質ヒドロペルオキシドグルタチオンペルオキシダーゼ（PHGPx）の cDNA およびゲノム遺伝子のクローニングからはじめ、PHGPx の機能を介したリン脂質ヒドロペルオキシドの機能の解析に着手しました。以後、北里大学薬学部にてこれまでに 20 年務め、この間に講師、准教授、そして 2013 年 4 月から、中川靖一教授の後任教授として、衛生化学教室を主宰させていただいております。この間、私は一貫して、PHGPx の細胞レベル、個体レベルでの機能解析をとおして、脂質ヒドロペルオキシドの新たな機能について解析を進めてきました。PHGPx には一つの遺伝子からミトコンドリア型、非ミトコンドリア型（細胞質と核内に分布）、核小体型の 3 つのタイプのアイソフォームが転写されることが明らかとなり、高発現株を用いた細胞レベルでの解析から、非ミトコンドリア型がロイコトリエンやプロスタグランジンの産生制御に関わること、ミトコンドリア型がアポトーシス刺激によるミトコンドリア内のカルジオリピンの酸化を抑えることにより、チトクローム C の放出を抑制することでアポトーシスを抑制すること、核小体型は細胞周期制御に関与することなどを見出しました。また PHGPx は精子形成過程で著しく増加し、精子ミトコンドリアにタンパク質が多く存在しているのですが、ヒトの重度の男性不妊症患者において、精子における PHGPx の著しい低下症を世界ではじめて見出すことができ、さらに精巣特異的 PHGPx 欠損マウスを作成したところ雄が不妊となったことから、PHGPx の欠損が男性不妊症の原因遺伝子の一つであることを明らかにできました。

平成 18 年（2006 年）10 月から、科学技術振興機構（JST）さきがけ「代謝と機能制御」（西島正弘総括）の研究生として加えていただいたことで、様々な臓器特異的 PHGPx 欠損マウスを作成することができ、特に心臓特異的 PHGPx 欠損マウスが胎生致死となるところを、ビタミン E 添加食によって完全にレスキューできることや、PHGPx 欠損による細胞死がこれまでの報告ある細胞死とは異なる細胞死経

路によって致死となることを見いだすことが出来ました。さきがけ研究では、西島正弘総括（昭和薬科大）、新井洋由先生（東大院・薬）をはじめ、田口良先生（中部大）、中西広樹先生（秋田大）との共同研究で行わせていただいた酸化脂質のメタボロームの解析や、村上誠先生（都医学総合研）、青木淳賢先生（東北大・薬）、有田誠先生（東大・薬）など素晴らしい先輩や後輩の中で切磋琢磨できたこと、とても貴重な経験になりました。現在は、さらにこのさきがけ研究を発展させ、PHGPx とビタミンEによって制御されている酸化リン脂質の産生制御機構や、酸化リン脂質を感知する機構、酸化脂質が関わる疾患の新たなメカニズムの解明や予防法、治療法の開発に取り組んでいます。

今後は、北里大学薬学部から、一人でも多くの脂質研究に携わるような若い優秀な学生を育て、日本脂質生化学会で発表できるように指導していけたらと考えております。どうぞ宜しくお願いいたします。

会の活動状況

1 第 55 回日本脂質生化学会・研究集会の開催

実行委員長：東北大学大学院 薬学研究科 分子細胞生化学分野・青木 淳賢 教授

日時：平成 25 年 6 月 6 日(木)、7 日(金)

場所：松島大観荘（宮城県松島町）

演題数：特別講演 2、シンポジウム 2、ランチョンセミナー1、一般演題 57、参加者 190 名

2 平成 25 年度日本脂質生化学会・総会の開催

平成 25 年 6 月 6 日(木)、第 1 会場（千代 I）にて開催された。

総会次第

和泉孝志会長の挨拶の後、以下の議事が進行された。

(1) 平成 24 年度事業ならびに決算報告

平成 24 年度事業報告ならびに決算報告がなされ了承された。

(2) 平成 25 年度事業計画ならびに予算案

平成 25 年度事業計画ならびに決算報告がなされ了承された。

(3) 役員・名誉会員・幹事の選出および名誉会員の推薦

現役員の紹介がなされた。

会長 和泉孝志

庶務幹事 原俊太郎

会計幹事 保坂公平

会計監査 西島正弘

平成 26～28 年度幹事の選出：平成 25 年 12 月 31 日までの任期の幹事に加え、以下の 2 名の新幹事が推薦され、了承された。

伊藤俊樹（神戸大）

今井浩孝（北里大）

(4) 平成 26 年度（第 56 回）学会準備状況の報告

実行委員長：近畿大学理工学部生命科学科生化学・岩森正男 教授

日時：平成 26 年 6 月 6 日(金)、7 日(土)

場所：近畿大学東大阪キャンパス

(5) 平成 27 年度（第 57 回）学会実行委員長の選出

幹事会における選挙により、新井洋由教授（東京大）が実行委員長に選出された。

(6) 脂質データベース構築委員会の活動報告

アーキア脂質をネット上で公開した。

(7) その他

第 1 回幹事会にて、五十嵐靖之先生より 2013FASEB 国際学術会議(8/4-8/9)の開催についての告知が行われた。

以下の議題について継続審議することになった。

・要旨集掲載の要旨の学術的位置づけ

・賛助会員および広告収入を増やす方策

3 平成 25 年度日本脂質生化学会・第 1 回幹事会

日時：平成 25 年 6 月 6 日(木)

場所：松島大観荘（宮城県松島町） 第 3 会場（藤 I）

議事：上記総会と同じ

- 4 平成 25 年度日本脂質生化学会・第 2 回幹事会
日時：平成 25 年 12 月 25 日(水) 17:30-19:00
場所：東大薬学部 10F 会議室

議事

- (1) 平成 25 年度事業報告、決算案の審議がなされ、了承された。事業案は上記総会報告、決算は巻末を参照されたい。
(2) 平成 26 年度事業計画、予算案の審議がなされ、了承された。

1) 平成 25 年度事業報告

会員数 585 名（平成 25 年 11 月 30 日）

（名誉会員 32 名、正会員 527 名、学生会員 26 名）

新入会 20 名（正会員 9 名、学生会員 11 名）

退会 28 名（正会員 25 名、学生会員 3 名、会費未納による退会正会員 5 名含む）

退会名誉会員 遠藤 章 先生（東京農工大学）

退会幹事 ・菊川 清見（東京薬科大学）

・小堤 保則（京都大学大学院生命科学研究科）

・里内 清（福山大学）

・寺本 民生（帝京大学医学部）

幹事辞退 ・田口 良 先生（中部大学）

会費納入率 85.1 % （平成 24 年度 11 月末実績 78.5 %）

賛助会員 13 社（37 口）（平成 24 年実績 14 社 38 口、平成 23 年実績 15 社 45 口）

役員	会長	和泉孝志	（平成 26 年 12 月 31 日迄）
	庶務幹事	原俊太郎	（同上）
	会計幹事	保坂公平	（同上）
	会計監査	西島正弘	（同上）

名誉会員

山川民夫（名誉会長）、赤松 穰、池澤宏郎、市原宏介、井上圭三、植田伸夫、小野輝夫、鬼頭 誠、古賀洋介、斉藤国彦、渋谷 勲、鈴木邦彦、脊山洋右、武富 保、玉井洋一、内藤周幸、永井克孝、中野益男、西島正弘、野沢義則、野島庄七、箱守仙一郎、橋本 隆、林 陽、飯田静夫、牧田 章、矢野郁也、山田晃弘、山本 章、山本尚三、横山信治、和久敬蔵

幹事

（任期 平成 26 年 12 月 31 日迄）

池田郁男、石井 聡、岩渕和久、岩森正男、植田和光、上田夏生、内海英雄、榎本和生、菊田安至、佐々木雄彦、佐藤隆一郎、島崎弘幸、白井康仁、杉本博之、鈴木康夫、高桑雄一、多久和陽、徳村 彰、花田賢太郎、宮澤陽夫、横溝岳彦

（任期 平成 27 年 12 月 31 日迄）

青木淳賢、青山俊文、阿部敏明、荒木英爾、五十嵐靖之、和泉孝志、板倉広重、井ノ口仁一、入谷信子、梅田真郷、大島美恵子、大隅 隆、岡本光弘、奥山治美、川口昭彦、京ヶ島守、久下 理、久保田勝、黒木由夫、小林哲幸、齋藤政樹、須貝昭彦、鈴木明身、鈴木 隆、田中 進、谷口直之、中村和生、中山玲子、名取泰博、平林義雄、廣野治子、深見希代子、宮崎 章、柳田晃良

(任期 平成 28 年 12 月 31 日迄)

新井洋由、板部洋之、井上裕康、太田明德、大西正男、岡島史和、加納英雄、小林俊秀、清水孝雄、瀬藤光利、高橋吉孝、堀内正公、松澤佑次、保田立二、山下 哲、吉岡 亨、吉本谷博、渡部紀久子

(任期 平成 29 年 12 月 31 日迄)

厚味巖一、伊藤俊樹、伊東 信、今井浩孝、大木和夫、岡崎俊朗、笠間健嗣、金保安則、唐澤 健、木原章雄、櫛 泰典、坂根郁夫、菅谷純子、杉浦隆之、杉本幸彦、鈴木 聡、瀧 孝雄、竹縄忠臣、中島 茂、原俊太郎、保坂公平、松本幸次、村上 誠、室伏きみ子、矢富 裕、山下 純、横田一成、横山和明

賛助会員:13 社 (計 37 口)

- (5 口) 小野薬品工業 (株)、塩野義製薬 (株)
- (4 口) アステラス製薬 (株)、第一三共 (株)
- (3 口) 旭化成ファーマ (株)、大日本住友製薬 (株)、大鵬薬品工業 (株)
- (2 口) (株) 大塚製薬工場、花王 (株)、(株) ヤクルト本社、雪印メグミルク (株)
- (1 口) (株) エー・イー企画、中外製薬 (株)

事業

イ) 平成 26 年度 (第 56 回) 学会

実行委員長 : 近畿大学理工学部生命科学科生化学・岩森正男 教授
日時 : 平成 26 年 6 月 6 日 (金)、7 日 (土)
場所 : 近畿大学東大阪キャンパス

ロ) 脂質生化学研究 56 巻発行

演題募集 (Circular2014 の発行時に)	3 月初旬
演題申込および原稿締切	4 月上旬
プログラム編成会議	4 月中旬
入稿	4 月下旬
講演集発送	5 月下旬

ハ) 脂質生化学研究 Circular2014 の発行 2 月下旬

ニ) 会議

日本脂質生化学研究会総会	2014 年 6 月 6 日
第 1 回幹事会	2014 年 6 月 6 日
第 2 回幹事会	2014 年 12 月中旬

(3) 第 56 回日本脂質生化学会の準備状況について岩森正男先生から説明があった。

(4) 脂質データベース構築委員会の活動報告

アーキア脂質をネット上で公開した。

日本脂質生化学会
平成25年度決算報告及び平成26年度予算（案）

収入の部	平成25年度		平成26年度
項 目	予 算	決算	予 算
正会員会費	2,500,000	2,461,000	2,500,000
賛助会員会費	450,000	370,000	400,000
講演集売上	150,000	125,000	150,000
広告収入	400,000	156,562	300,000
利子	200	261	200
雑収入	20,000	28,399	20,000
小計	3,520,200	3,141,222	3,370,200
前年度よりの繰越金	1,922,942	1,922,942	1,924,249
計	5,443,142	5,064,164	5,294,449

支出の部	平成25年度		平成26年度
項目	予 算	決算	予 算
研究集会補助	900,000	900,000	900,000
会報製作費	200,000	176,531	200,000
講演集製作費	800,000	584,598	600,000
旅費	100,000	90,000	100,000
郵送・通信費	360,000	339,618	360,000
事務用品費	80,200	37,495	80,200
会合費	100,000	83,672	100,000
謝金	50,000	0	50,000
総会経費	10,000	0	10,000
事務経費	150,000	150,000	150,000
事務委託費	760,000	778,001	810,000
雑費	10,000	0	10,000
小計	3,520,200	3,139,915	3,370,200
次年度への繰越金	1,922,942	1,924,249	1,924,249
計	5,443,142	5,064,164	5,294,449

賛助会員

- (5 口) 小野薬品工業株式会社
 塩野義製薬株式会社
- (4 口) アステラス製薬株式会社
 第一三共株式会社
- (3 口) 旭化成ファーマ株式会社
 大日本住友製薬株式会社
 大鵬薬品工業株式会社
- (2 口) 株式会社大塚製薬工場
 花王株式会社
 株式会社ヤクルト本社
 雪印メグミルク株式会社
- (1 口) 株式会社エー・イー企画
 中外製薬株式会社

(以上 1 3 社 3 7 口)

日本脂質生化学会 会則

第1条 名 称

本会を日本脂質生化学会(The Japanese Conference on the Biochemistry of Lipids, JCBL)と称する。

第2条 目 的

本会は脂質の領域における化学的、生化学的研究の発展と向上を図り、あわせて研究者相互の連絡および親睦を深めることを目的とする。

第3条 事 業

本会は、第2条の目的を達成するために、次の事業をおこなう。

- (1)研究集会の開催
- (2)その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第4条 会 員

本会の会員には次の種類がある。

- (1)正会員は、脂質の化学的、生化学的研究に従事し、本会で定めた会費を納入する者。
- (2)学生会員は、大学院または大学等に在籍し、脂質の化学的、生化学的研究に関連する分野を専攻する者で、正会員 1 名の推薦をうけて本会に登録を行い、本会で定めた会費を納入する者。
- (3)賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会を維持することに協力し、本会で定めた会費を納入する者。
- (4)名誉会員は、幹事会の推薦により、総会の承認で決定される。名誉会員の会費は免除される。

第5条 役 員、幹 事、名誉会長

- (1)本会は、その運営のために、役員として会長1名、庶務幹事1名、会計幹事1名、会計監査1名をおき、役員会を構成する。
- (2)本会の運営上の重要事項について役員会の諮問に応ずるものとして幹事をおく。
- (3)役員および幹事は幹事会を構成し、会務の一切を処理する。幹事会は決定事項を総会に報告し、その承認を得るものとする。
- (4)名誉会長をおくことができる。名誉会長・名誉会員は幹事会に出席して意見を述べることができる。
- (5)会長、庶務幹事、会計幹事、会計監査の任期は2年とし、幹事の任期は4年とする、重任はさまたげない。

第6条 総 会

総会は、会長がこれを招集し、次の事項を審議し、決定または承認する。決定または承認は、総会出席者の半数以上の合意を必要とする。

- (1) 予算および決算に関する事項
- (2) 幹事会の提案事項
- (3) 幹事会の決定に関する承認事項
- (4) その他

第7条 経 理

本会を運営するために、次の如く経理をおこなう。

- (1) 本会の事業年度は、毎年1月1日より12月31日とし、予算および決算を会報に掲載する。
- (2) 経理は、会計監査によって監査される。
- (3) 当該年度の経理状況は、総会に報告され、その承認を得るものとする。
- (4) 本会の経費は、会費および寄附金による。

第8条 事 務 局

本会は会務に関する一切の事務をおこなうために事務局を置き、庶務幹事がこれを運営して、会員の便宜を供する。

本会の事務局は、〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-12 新宿ラムダックスビル10階(株)春恒社内におく。

附則

- (1) 本会則は、総会の承認を経て変更することができる。
- (2) 本会の会費は、幹事会で決定し、総会の承認を得るものとする。

(平成14年6月14日改訂)

(平成17年6月2日改訂)

(平成 23 年5月12日改訂)

学会事務の取り扱い内容と連絡先

日本脂質生化学会の事務局は、(株)春恒社内に置き、以下の事務取り扱いを行なっております。

1. 入会・退会の受付
2. 年会費の請求および徴収
3. 所属・住所・氏名等の変更の受付
4. Circular および要旨集の発送とその未着クレーム等の受付

日本脂質生化学会事務局の連絡先

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2-4-12 新宿ラムダックスビル 10F
(株)春恒社 学会事業部内
TEL : 03-5291-6231
FAX : 03-5291-2176
E-mail : JCBL@shunkosha.com

日本脂質生化学会の年会費は、正会員 5,000 円、学生会員 3,000 円です。入会ご希望の方は上記の日本脂質生化学会事務局までお問い合わせ下さい。

日本脂質生化学会 会長 和泉孝志



THE JAPANESE CONFERENCE ON THE BIOCHEMISTRY OF LIPIDS

c/o Shunkosha Co., Ltd.

Lambdax Building 10F

2-4-12 Ohkubo, Shinjuku-ku, Tokyo 169-0072, Japan

JCBL@shunkosha.com

Tel : +81-3-5291-6231, Fax: +81-3-5291-2176

日本脂質生化学会事務局

〒169-0072

東京都新宿区大久保2-4-12 新宿ラムダックスビル 10F

(株) 春恒社 学会事業部内

JCBL@shunkosha.com

Tel : 03-5291-6231, Fax: 03-5291-2176